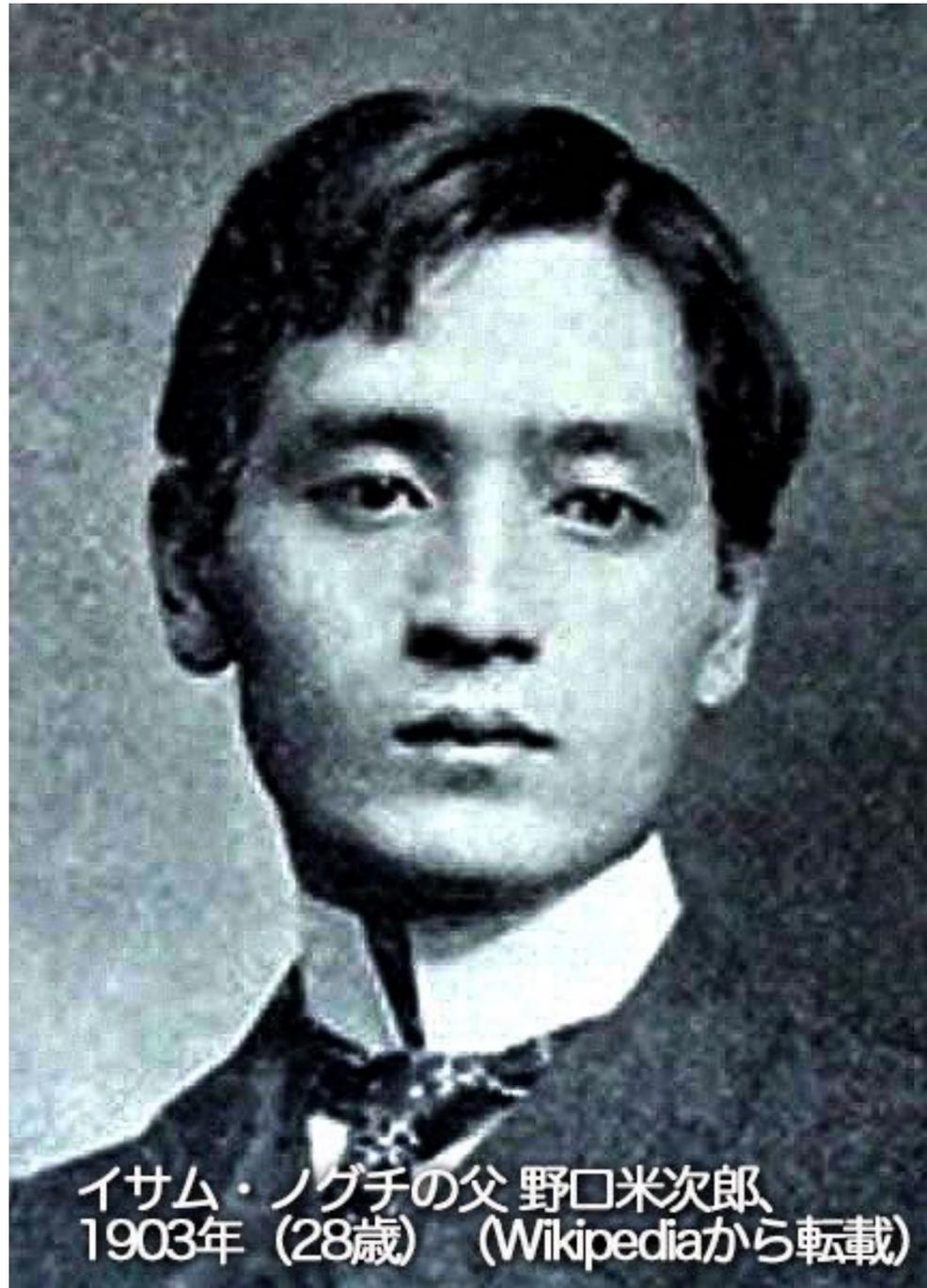
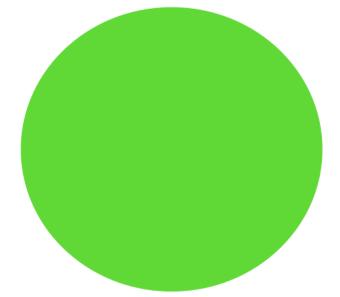
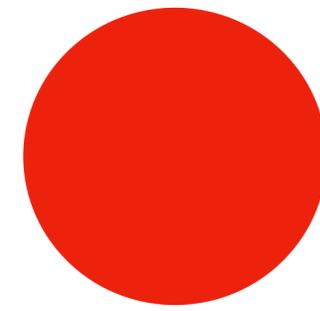


本日、参加いただきありがとうございます

- 簡単な紹介をお願いします。
- 自己紹介 場所など
- 参加の興味・関心などの根拠などお聞かせください。

# 今日のテーマ「イサム・ノグチの謎に迫る」

<https://www.noguchi.org/>



1923年(19)~1925年(20歳)

## イサム・ノグチと美術学校

○1924年、イサムノグチはレオナルド・ダ・ヴィンチ美術学校で初めて彫刻の授業を受けました。ノグチは、ルオトロの弟子として制作したアカデミックな彫刻から芸術家としてのキャリアをスタートさせました。

○レオナルド・ダ・ヴィンチ美術学校(「レオナルド」)は、ニューヨーク市に設立された美術学校(1923~1942年)で、最も有名な生徒はイサム・ノグチであり、その校長は彫刻家で詩人のオノリオ・ルオトロでした。

○彫刻を学ぶというノグチの決意を促すために、ルオトロは彼に他の仕事と同じくらいの給料の仕事を提供した。ノグチは後に「どうやって抵抗できたのでしょうか？自分の意志に反して彫刻家になったのです」と回想している。で、わずか3か月後、ノグチは個展を開催しました。ルオトロはまた、ノグチが外部の彫刻作品の依頼を受けるのにも貢献した。

### 恩師の作品



Helen Keller, 1919



Lincoln and Black Child, 1916

### オノリオ・ルオトロの作品

1925年(21)~1926年(22歳)

## イサム・ノグチと美術学校

○ ノグチほど、今日よく言われる故郷消失を文字通り生きた人は、珍しい。ノグチの作品と生涯には、どうやっても癒せない、心の傷がつきまとう。作品は、見果てぬ治療への叫びでもあった。それに向き合わないと、ノグチ作品の問いかけの真の声は聞こえてこない。



モデルはロシア人バレリーナ  
イサム・ノグチ(22歳) 1926年



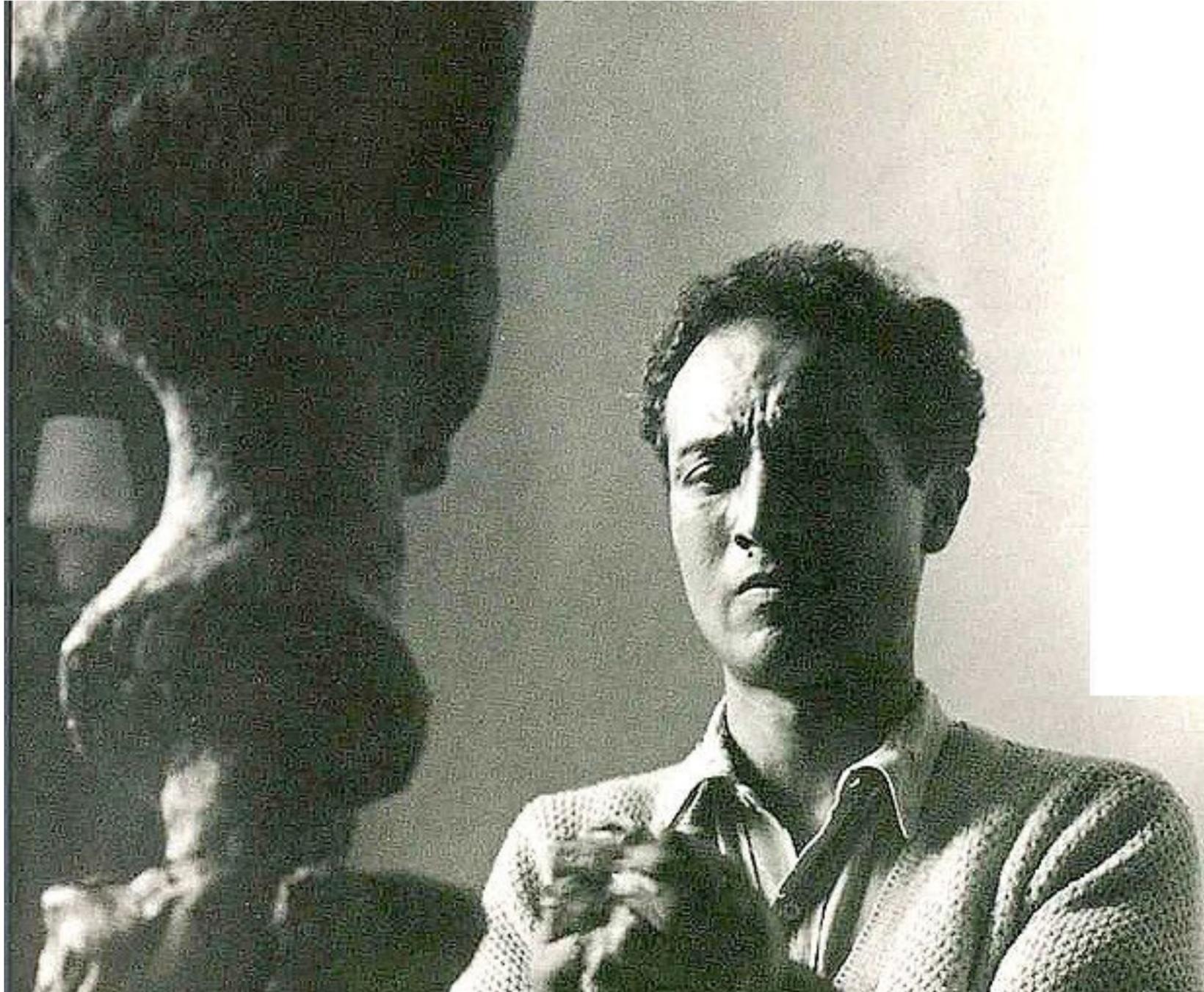
エメット・スコットの鏡像とイサム1924年20歳

○. 造形の天才の才覚と厳しい環境

ノグチは、どうやら生来モノづくりの才に抜群に恵まれていたらしい。造形の天才の才覚は、茅ヶ崎の母の家を建てた大工を相手にしている時に見せていたという。父に裏切られたノグチは、人間を別な目で見るとようになったのではないだろうか。母**レオニー・ギルモア**は、自立心の強い個性的な人であった。

1925年(21)~1926年(22歳)

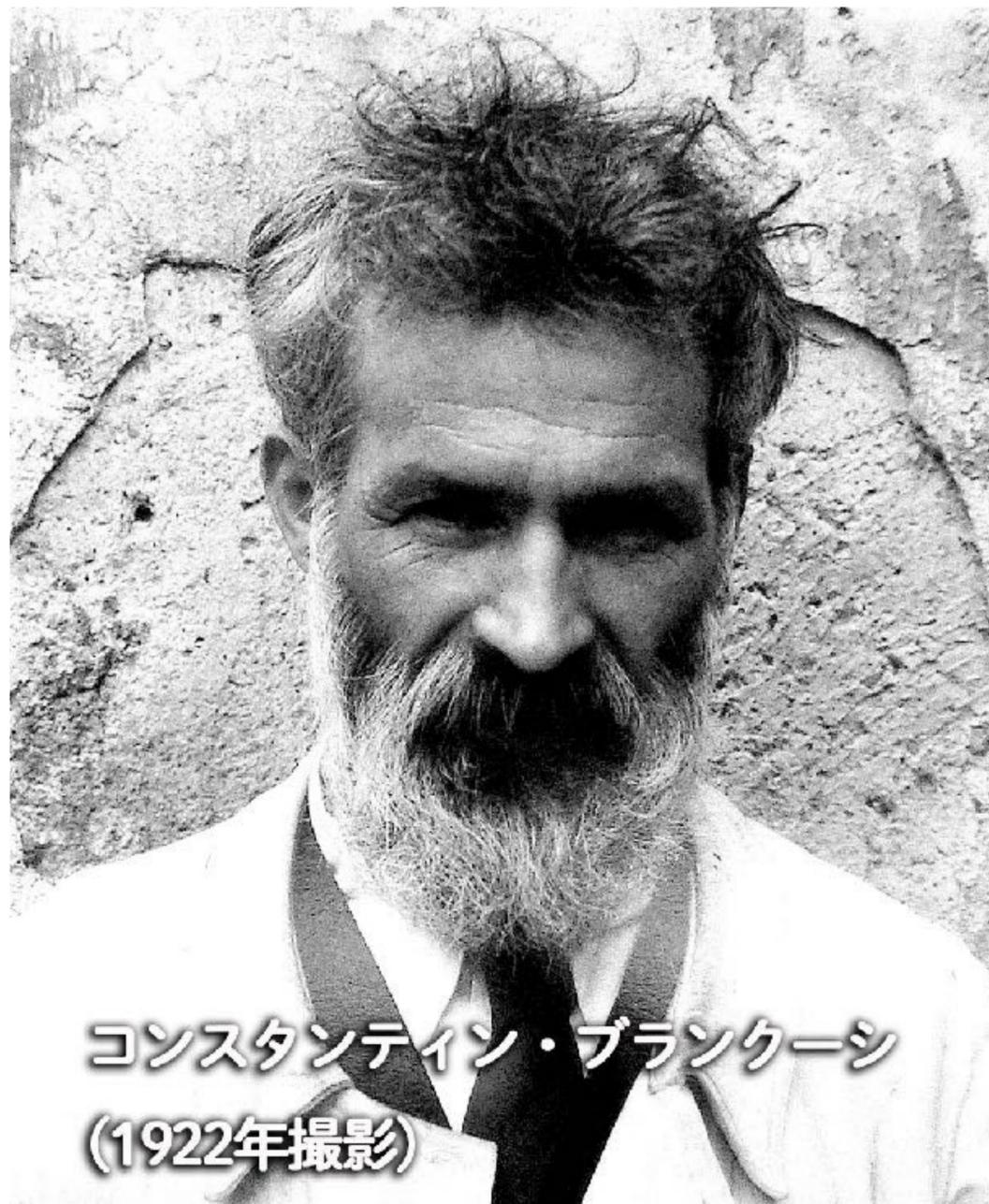
## 旅の人、ノグチ 故郷喪失者の「宿命」



- 今では差別用語でもある「混血」という言葉が秘める意味は、信じられないほど深い。ノグチの作品と生涯には、どうやっても癒せない「心の傷」が癒せない。作品は、見果てぬちゆへの叫びでもあった。
- 14歳で大西洋を一人で渡り、アメリカ中部のインターラーケンまで何週間も一人旅をしたことだ。ノグチが孤独を好んだのも、人を嫌ったのでもなく、そういう厳しい環境がノグチという個性をつくり上げていったようだ。
- 国立デザインアカデミーとペンシルヴェニア美術アカデミーに具象彫刻を出品、ブルマー画廊で「ブランクシー展」を見て刺激を受ける。

1925年(21)~1926年(22歳)

イサム・ノグチとブランクーシー



コンスタンティン・ブランクーシー  
(1922年撮影)



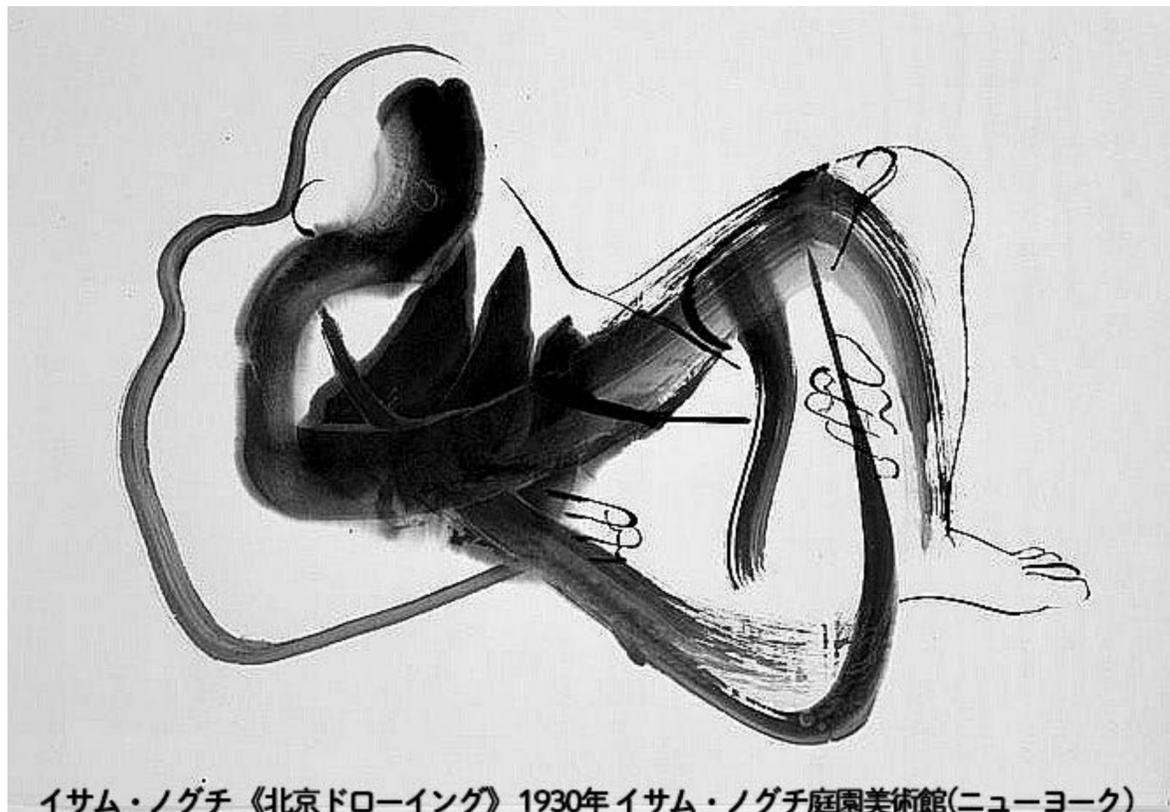
彫刻家コンスタンティン・ブランクーシーのアトリエを再構成した、  
パリ・ポンピドゥーセンターにある〈アトリエ・ブランクーシー〉

1925年(21)~1926年(22歳)

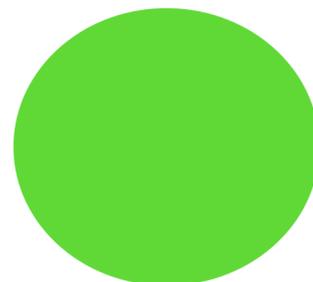
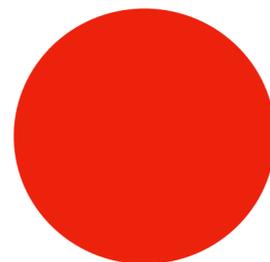
## イサム・ノグチとアメリカ



1. 《伊藤道郎の像》1925~26年  
イサム・ノグチ庭園美術館 (ニューヨーク)



イサム・ノグチ 《北京ドローイング》1930年イサム・ノグチ庭園美術館(ニューヨーク)



○. 1925年、ノグチはニューヨークで活躍していた日本人の舞踏家の仮面を制作した。これがノグチにとって初めての演劇関連のデザインであった。2年後にグッゲンハイム奨学金を獲得し、パリに留学する。6ヶ月間、彫刻家コンスタンティン・ブランクーシに師事してアシスタントを務め、夜間の美術学校に通うが、1年後に奨学金の延長が認められずニューヨークに戻り、アトリエを構える。翌年、個展を開いた。

## 1927年(23)~1928年(24歳)

○ ブランクーシー的モダンの苦闘とも、決別とも言える平面作品。禅画思わせる「立体的平面」、「平面的立体」とも捉えられ、ある意味で非常に東洋的でもある。有機的なものと無機的なものの融合」と指摘する。ユーモラスな揺らめく曲線が特徴的である。

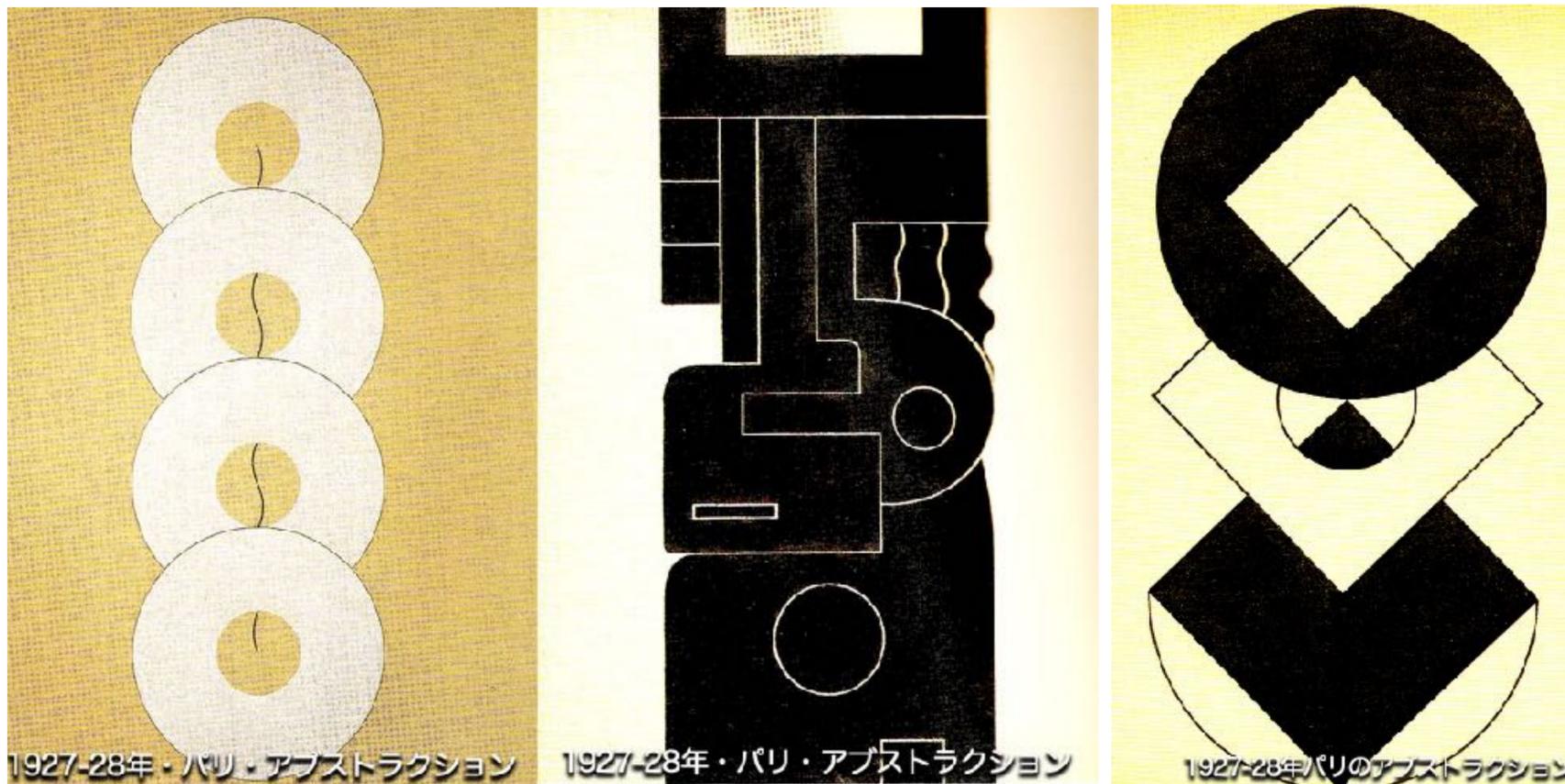
## イサム・ノグチ・パリでの苦闘

### ○ 苦闘のパリ時代

ブランクーシーに弟子入りし午前中助手として働く。午後は大学で、デッサンを学び、石彫、木彫を製作する。ブランクーシーの影響から抜け出して、早くも独自の作品を試行し始める。

### ○ パリ時代で学んだ抽象美学

形を徹底して切り詰めて、ボリュームそのものがまさに空中を浮いているようなピュアな抽象を達成したブランクーシーに対峙したノグチ。その逡巡は「**パリ・アブストラクション**」と称される、彫刻を二次元に透かせた。平面構成スターディーなどによく現れている。彼がそのような幾何学的な造形操作に自らを投じ、身に付けようと必死に苦闘していたことがわかる。



1927-28年・パリ・アブストラクション

1927-28年・パリ・アブストラクション

1927-28年パリのアブストラクション

1929年(25歳)

## イサム・ノグチとアメリカ



マリオン・グリーンウッド 1929年(25歳)



バックミンスター・フラ  
ブロンズにクロムメッキ1929

○ ノグチは特にマリオン・グリーンウッドの顔に魅了されたに違いない。鑄鉄によるグリーンウッドの肖像が描くのは整った顔立ちの目の大きな女性。ノグチは恋をして、書翰(しょかん)を送っている。一人の人物の本質を掴(つか)もうとする試みが、一種の構造化された親密さを持つことに成功している。(1929作・25歳)

○ バックミンスターは、8歳年上でノグチの師となった。フラーは、ノグチに大きな影響与えた。特に空間と構造の新しいテクノロジーを代表していたからだ。フラーの頭部はがっしりとした顎、決然とした口もと、禿(は)げ上がった額によって自信に満ち溢れて見える。二つのなめらかな眼窩(がんか・・目の淵の窪み)反射のせいで正確な形は読み取りにくい。それは未来と自分自身の内部とを同時に見つめているようだ。

1930年(26)~1931年(27歳)

## 身体の人、ノグチ

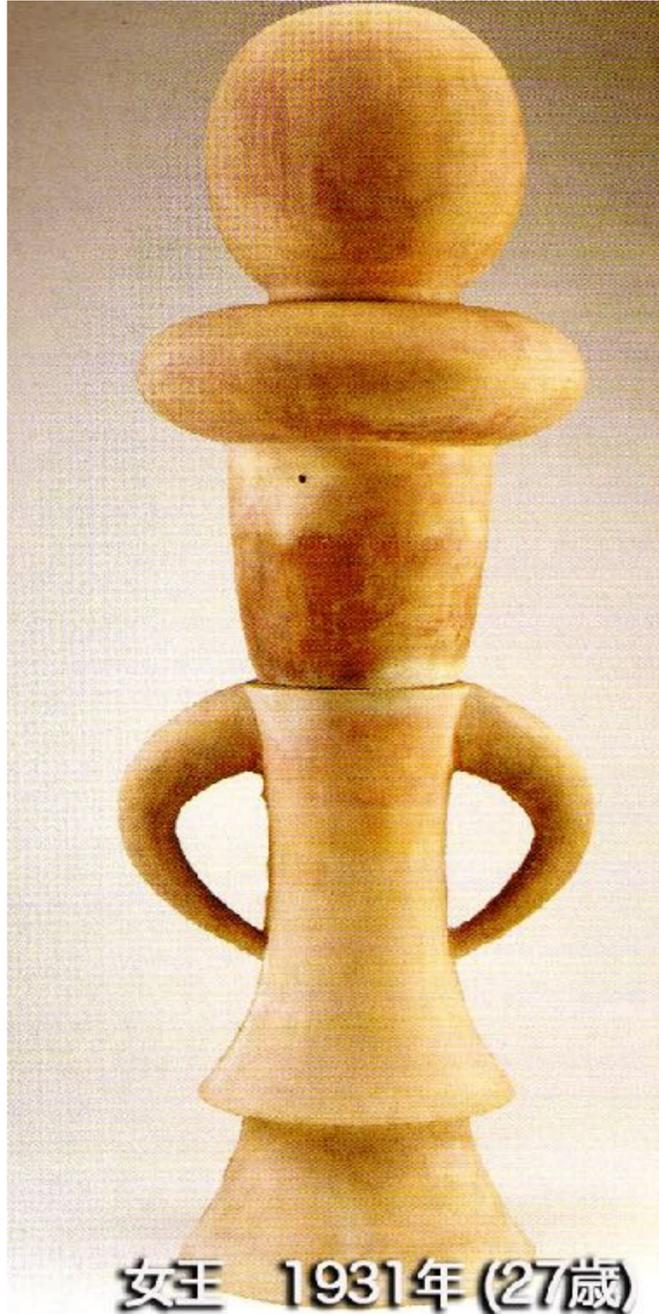
大胆なタッチで描かれた生命の血流



スタンディング・ヌード・ユース  
1930年(26歳)



北京ドロ잉  
(立つ女)1930(26歳)



女王 1931年(27歳)

### ○ 大胆な筆致で描かれた生命の血流・「北京ドロイング」の意味

北京ではモデル代が安くて助かったという逸話もあるが新たに水墨画の巨匠、**齊白石**(せいはいくせき・1864~1957)に習った。しかし実際には、ほとんど自ら体得したと思われる筆と墨による人体ドロイングに没頭する。

### ○ 諦めた眼差しを持つ、アール・デコのな埴輪

京都、五条坂、**宇野仁松(うのにんまつ)**の窯で制作したもの。初期のノグチによる陶彫の最高傑作0イメージの源は、弥生の埴輪である。「北京ドロイング」の人間臭さに対して、何とも非人間的で冷たい印象を受ける。冥府(めいふ・死後の世界)のための彫刻として、醒めたような諦めた眼差しを持ち、ノグチ作品に終生つきまとっていた冷気を感じる。アール・デコのな埴輪とでも言える。後期の石彫に特徴的な、分割=統合的手法(ボニー・リチャック氏指摘)が早くも現れている。

1930年(30)~1935年(31歳)

## シュルレアリスム的な人体解釈



《北京ドローイング(傾く男と少年)》1930年  
イサム・ノグチ庭園美術館 (ニューヨーク)



○ 20代の半ばには北京に7ヵ月間滞在、篆刻・水墨画の巨匠であった**齊白石**と出会い、墨絵を学び、**北京ドローイング**と呼ばれる大作の身体素描を残します。その後に訪れた日本では、テラコッタによる身体像を制作しました。

○ また、ノグチはダンス等の舞台装置を手がけ、**舞踏家マーサ・グラハム**とは1935年の「**フロンティア**」以降、30年に及ぶ共同作業を行っています。それはノグチに身体と彫刻との関係について重要な示唆を与えました。

「**ヘロディアド**」では、シュルレアリスム的な人体の解釈とも言えるものが矩形に傾いた背景に映える。

## 1930年(26)~1934年(30歳)

## 戦中のイサム・ノグチ

○ ノグチは1930年から1931年にかけて、**パリ**を経由して日本に渡航、**京都・奈良**などを周遊し、窯元で**陶芸**を学ぶなどして、約8ヶ月程度滞在した。この日本滞在の折、**長野県軽井沢の新渡戸稻造別荘**で、同じく偶然滞在していた**チャールズ・リンドバーグ**と言葉を交わしている。

○ ノグチは1931年東京で父米次郎に再会。京都で焼き物を制作し、禅の庭をまわる。27歳

○ 1935年マーサー・グラハムのための舞台装置を制作。カルフォルニアに移る。**メキシコでの巨大壁画制作 31歳**(リンクあり)

○ **第二次世界大戦**の勃発に伴い、在米日系人の**強制収容**が行われた際には自ら**アリゾナ州のポストン戦争強制収容センター**に志願拘留された。しかし、アメリカ人との**混血**ということでアメリカ側のスパイとの噂が立ち、他の収容者達から、冷遇されてしまった。その事から、自ら収容所からの出所を希望するも、今度は日本人であるとして、出所できなかった。後に、芸術家仲間**フランク・ロイド・ライト**らの嘆願書により出所。その後は、ニューヨークの**グリニッジ・ヴィレッジ**にアトリエを構えた。38歳



1942年(38)~1943年(39歳)



ホuston収容所のイメージ写真



ワシントン・スクエア・アーチ



フランク・ロイド・ライト  
建築家

## 戦中のイサム・ノグチ

○. 第二次世界大戦(1941)の勃発に伴い、在米日系人の強制収容が行われた際には自らアリゾナ州のポストン戦争強制収容センターに志願拘留された。しかし、アメリカ人との混血ということでアメリカ側のスパイとの噂が立ち、他の収容者達から、冷遇されてしまった。その事から、自ら収容所からの出所を希望するも、今度は日本人であるとして、出所できなかつた。後に、芸術家仲間フランク・ロイド・ライトらの嘆願書により出所。その後は、ニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジにアトリエを構えた。

38歳

1941年(37)~1942年(38歳)

日米開戦下のイサム・ノグチ



真珠湾攻撃による日米開戦



強制収容所

○ アーシル・ゴーキーとカルフォルニアに行き、日米開戦を迎える。その後、アリゾナの日系アメリカ人の収容所に半年、自主的に半年間入所する。芸術家仲間**フランク・ロイド・ライト**らの嘆願書により出所。その後は、ニューヨークの**グリニッジ・ヴィレッジ**にアトリエを構えた。1942年(38歳)にニューヨークに戻ってから、グリニッジ・ヴィレッジの**マクドガル・アレー**にアトリエを構える。

1943年(39)~1948年(44歳)

## 庭の造形とイサム・ノグチ

### ○ 遠い上空から異星を眺める、ノグチ独特の「庭」の感覚 私のアリゾナ1943年(39歳)

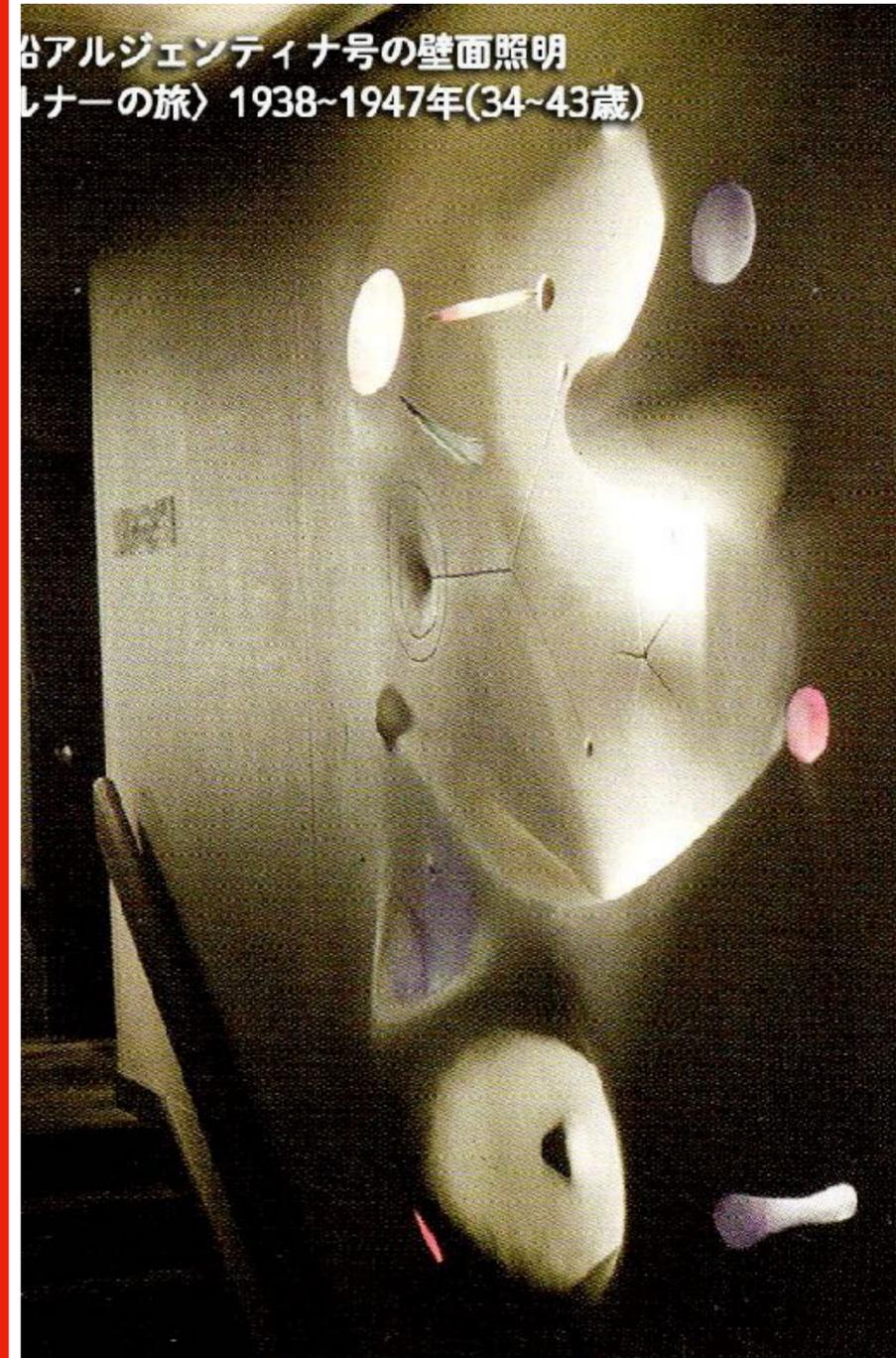
一見ユーモラスにも見えるが、**アリゾナの収容所**での忘れ難い記憶、体験を引きずっている。この作品では、鳥轍図のように、**遠い上空から異星を眺める**ようなノグチ独特の「庭」の造形が早くも現れてもいる。壁掛けのレリーフのようでもあり、またシュルレアリスム的な、肉体の内側、筋や皮膚の振(ねじ)れなども感じさせる、ノグチの多面性、多層性を発揮した作品。

### ○ 客船アルジェンティナ号の壁面照明 (ルナーの旅) 1930~1947年(34~43歳)

マグネサイト1930年代から試みていた、光を内包する彫刻のシリーズ「ルナー」の集大成的インテリア作品である。**壁面を大地とすれば**、作品部分はえぐられた身体でもあり、光が通過するトンネル、あるいは舞踊する**異星の庭**の光景でもある。1938年のニューヨーク万博の〈**フォード社の泉**〉を制作した際に出会った新素材「マグネサイト」を使用している。アルジェンティナ号は、1959年に廃船となった。

アリゾナ1943年(39歳)

客船アルジェンティナ号の壁面照明  
(ルナーの旅) 1938~1947年(34~43歳)

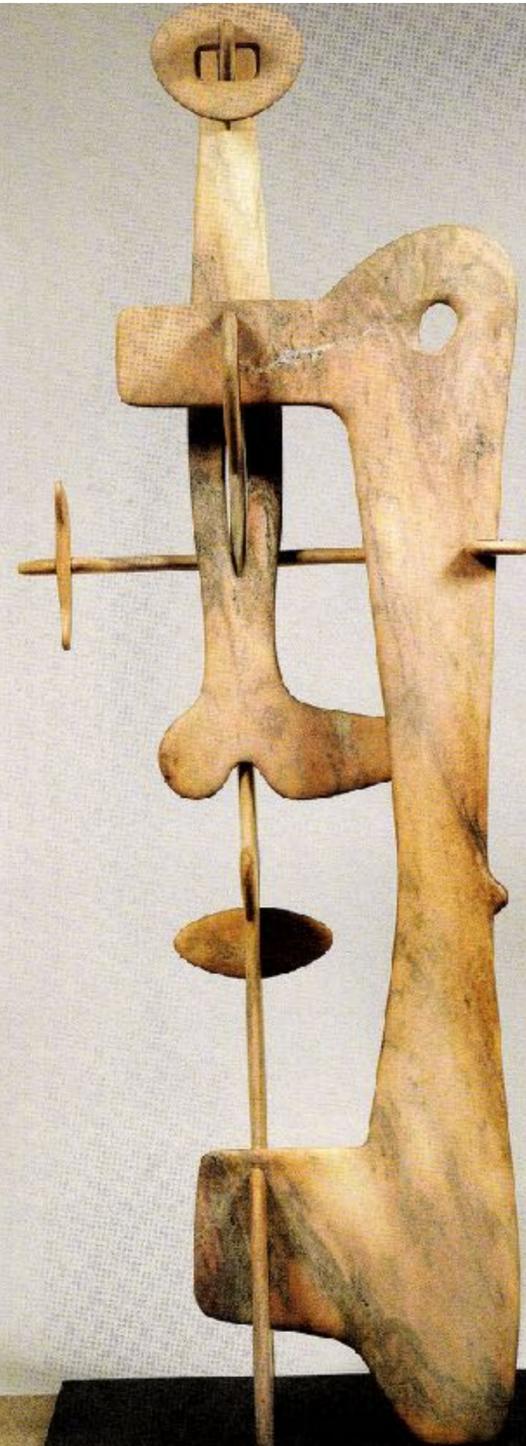


1944年(40)~1945年(41歳)

## 抽象表現主義とイサム・ノグチ



追憶 1944年 マホガニー材



クローズ 1945年(41歳)

○ 追憶. 1944年(40歳)

○ 慄然と直立するノグチ中期の代表作

クローズ1945年(41歳)

メトロポリタン美術館の20世紀ギャラリーに、抽象表現主義作家の名作群として常設されている、ノグチ中期の代表作。古代ギリシャのアッテイカでつくられた、人体彫刻（青年裸体立像）へのオマージュだろうか。マーサ・グラハムの舞台装置から発想したインターロック彫刻の集大成でもある。自らの子供を喰い尽くす「神=子喰い魔」として、慄然と直立するさまは、すべてを「抉(えぐ)り出す大きな凶器、ナイフのようにも見える。

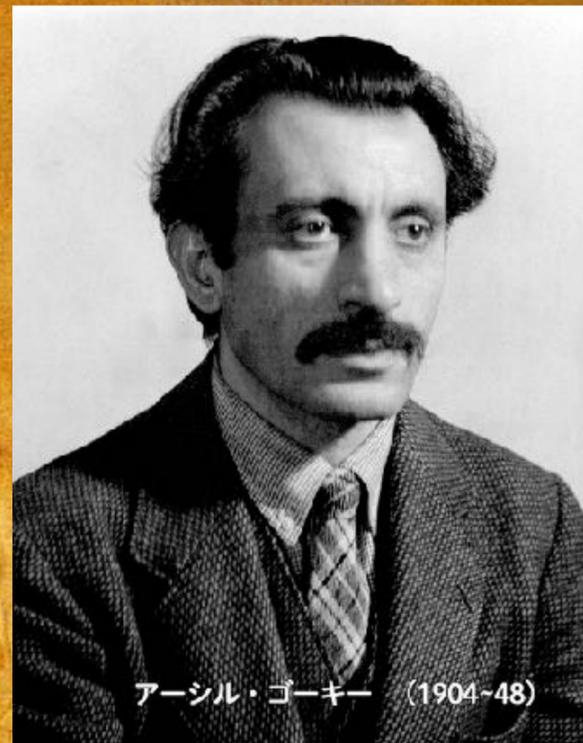
1943年(39)~1948年(44歳)

## ゴーキーの死とイサム・ノグチ

○ 彼の後年は災難が続いた。スタジオが火事で焼けた  
り、癌を患ったり、事故で首に怪我を負って利き腕が麻痺  
したり、妻が子供を連れて家を出たりという不幸が続  
き、1948年、44歳の若さで首吊り自殺した。

### ○ アーシル・ゴーキーの死

ノグチの親友で、自死した抽象表現のパイオニアに、  
アーシル・ゴーキーがいる。ゴーキーの死は、ノグチに  
大きな悲しみを与えた。ゴーキーもまた、悲惨な内乱を  
逃れてアルメニアから移民して来た「宿命の芸術家」だ  
った。故郷ソチの庭を描いた明るい絵の後、自死する  
前年のゴーキーに《サメイション、総和》(上)という  
モノクロームの絵がある。生命がさまざまにうごめき、  
踊り、咲きながら横溢するようで、この絵には底知れぬ  
恐ろしさ、諦め、悲しみ、そういうものが巣食ってい  
る。ともに優れて身体的、シュルレアリスムの造形であ  
るにも関わらず、それらは、むしろ、シュルレアリスム  
の現実逃避の苦渋、苦悶、その呻(うめ)きのように聞こ  
えてきてならないからであった。



サメイション、総和 1947年(43歳)

○ 本日のテーマはどうでしたか。  
ご感想お聞かせください。

<https://www.noguchi.org/>

○ 次回のテーマのご要望を承りますので、  
忌憚なくお話してください。

○ また次回お会いできますこと、  
楽しみにしています。